

幾つもの提灯に照らされた道を、土や機械油に汚れた人々が行き交う。彼らは二種類いる。

これから夜間の仕事へ向かう人と、昼間の仕事を終えた人。

だが、この場にいる人々の目的は同一だ。
食事。

これから仕事するための活力と夜食。仕事で疲れた体を休め、明日への鋭気を養うため。

人が活動するのに必要なそれを求め、人々はここに集っている。

左舷三番艦・「青梅」。

武蔵住民が住居を多く構え、同時に生産施設も多数存在する艦である。その為、労働者達への小さいが雑貨屋や食料品、料理店が充実している。

その表層。

道なりに並ぶ店に右舷二番艦・「多摩」のような派手さはないものの、隠れた名店が数多く存在するともっぱらの評判。その為、武蔵内部でも通好みとされ、雑誌などでもよく特集が組まれている場所でもある。

その青梅の道を行くのは、帽子を目深に被り、顔は覆面。右手に雑誌をもった青年だ。

点蔵は迷っていた。

……この本によればこの辺りのはずで御座るが。

右手に持っているのは今週号の武蔵情報誌「しゅらん」だ。表紙にはイメージキャラの中年酒乱ヒーローが酒瓶で全裸を殴り倒している。

……これの制作のときも大変で御座ったよなあ、としみじみ思い返す。

ヒーロー役の人が、マジに酒を飲んで酒乱状態になり、ガチでトリーをぶん殴る等のアクシデントが起こったのだ。

その後、暴行事件として聞いてやってきた番屋がトリー見るなり引き返したり、しかし撮影担当のヨハネス・ケプラーがノリノリでそのまま続行した為、殴られすぎてトリーが痙攣したりと非常に騒がしい事になった。結局最初の一撃目が一番マシだということを採用されたのがこの表紙である。

……ああ見えてトリー殿は頑丈で御座るからな。

懐かしい気分になりながらページをめくる。

今週の特集は「青梅B級グルメ名店特集。大人の小料理屋で居酒屋デビュー!!」とある。そのうちの1ページに目をやる。

未亡人の女将がやっている店で、「働き疲れたあな

たを癒す極上の酒と食事。落ち着いた雰囲気で居酒屋を体験しよう!!」とある。

よく考えれば自分は食事をする時などは大体青雷亭で済ませており、しかもいつもの連中と一緒にである。最近ではメアリの手料理があるので外食の機会も無くなってしまったが、ゆえに、一人でゆっくり飲むといった経験はない。青雷亭も正確には普通の食堂であり、居酒屋ではない。

……も、もしかして自分居酒屋童貞で御座るか!?

これはよろしくない。例えどんなことでもあっても童貞はよくない。外道共に知られれば一週間はバカにされ続けること間違いはない。

そんな折、メアリが青雷亭での料理教室に行くという。前日に喜美が女子会だのバジヤマパーティーと騒いでいたので、泊まりになるかもと言っていた。

夕食は青雷亭に顔を出せば御裾分けしますよと言ってくれたのだが。

……そんなことをすれば間違いなく殺されるで御座るよ。

なにせ何時もの連中に加え、立花・闇や伊達・成実も参加しているのだ。そんなところに乱入すれば間違い無く命は無い。

となると自分で調達するしかなく、機関部の連中に

いい店はないかと聞いてここを教えられたというわけだ。

「お、第一特務じゃないですか。どうです、いい娘いますよ?」

遊郭の呼び込みを片手で追い返す。

……と、どうか今の店員は一昨年卒業した忍術科の先輩ではなかったで御座らんか?

ということは声をかけてきたのは確信犯であり、店の中にはカメラや録音術式が仕掛けられていたに違いない。

現に武蔵の通信帯には、失敗したと無数に書き込まれている。

……仕事早すぎで御座らんかな。

おとなしく忍者飯で飢えを凌ぐか、BLUE THUNDERの方へいけばよかったかと軽く後悔していると、気が付けば店の前までたどり着いてしまっていた。

「おお、ここで御座るな」

青梅の通りより一つ裏手の路地。やや薄暗い中にその店はあった。木製の引き戸に提灯には店の名前であるう絹という文字。

しかし、そこで点蔵に躊躇いが生まれた。

……い、いかんで御座る。いざ入るとなると緊張す

るで御座る!!

普段こういう店に入ることのない点蔵にとつて暖簾のれんをくぐる一步が難しい。

頭の中には本多正信のようなダンディな大人ばかりがいて自分だけ浮いているという状況が浮かぶ、そうならば非常にづらい。実際は、その程度のことは気にしなくてもいいはずだが、気にしてしまうのは居酒屋童貞だからか。

……この感覚は中等部の時に罰ゲームでエロ草紙を買いに行かされた時と同じで御座るな。

大人の階段とはかくも急勾配であったか。

店の前で棒立ちしているのも不自然と思ひ、前の路地を行ったり来たりする。時折通りかかる生徒にはあたかも下水の調子が悪いのを調べているかのように躊りやり過ごす。

……これ絶対不審者扱いされてるで御座るよな。

● 画…『あんた格好からして不審者でしょ。今まで番屋にどれだけ第一特務が不審なんですーって通報があったと思ってるのよ』

・ 金マル…『ガつちゃん、それ本人がまたモロ出しするから秘密ってこないだ会議前に決まってなかったけ?』

通信棒を手刀で叩き割って立ち上がる。このまま悩

んでいても仕方ない。ろくでもない風評被害が増えてしまう。

いざ心に決めて立ち上がったところで声をかけられた。

「おや、第一特務も夕食ですか?」

立花宗茂だ。

「おや、宗茂殿もお食事で御座るか」

「はい。閨さんが女子会というものに出るので、今晩は自前で調達を」

よく見れば宗茂の腰にも自分の物と同じ雑誌がささっている。それに宗茂もまた機関部で働いていることが多い。ならば、行動が似通ってしまうのも仕方ないことであろう。

……これは絶好のチャンスに御座る。

なにせ同じ年齢とはいえ、宗茂は三征西班牙の第一特務であった男だ。三征西班牙は比較的年齢層の高い幹部が多い。つまり、宗茂はこういう場所にも行ったことのある可能性が高い。宗茂には悪いがダンにするしかない。

「第一特務のこの店がお目当てでしたか。私も機関部の人から聞いて気になりましたので」

ナイスフォロワー、と点蔵は思った。もしかすれば空気を読んで誘ってくれたのかもしれないが、相手はい

つもの外道共ではない。後々ほじくり返される心配はない。

「そ、そう御座る。自分もこの店の評判を聞いて気になつていたので御座るよ」

それに一度立花宗茂とは腹を割って話してみたいと思つていた。彼も三征西班牙では第一特務だった男だ。それに妻帯者としても先輩である。聞きたいこと語るべきことは多い。

「で、では入るとするで御座る」

「ええ」

少しばかり緊張しながら扉を開ける。

「テンゾーとムネムネじゃねーか。珍しい組み合わせだな。まあ座れよ」

割烹着を来た全裸がいた。

「——な、なんでトリー殿が居るので御座るか!! しかも割烹着で!!」

「あれだよ、裸エプロンに対抗してみたんだけどよ、これ前から全然露出少ないんでイマイチだと思わね?」

「うーん、せめて女装してからのほうが騙せるのでは御座らんかなー。って違うで御座るよ!!」

「細けーことはいいいじゃねーか、ほれ座れよ」

トリーの奇行はいつものことである。いつものこと

なのでいつものようにツツコミを入れたが、本来の目的とは違うことを思い出した。

「食事が取れるなら構わんで御座るが……」

ちらりと宗茂の方を見やる。

「お気になさらず。それに武蔵総長の料理の腕前は確認済みですから」

爽やかな笑顔で答えられる。

「では、邪魔するで御座るよ」

「へい、らっしやい!!」

カウンターの席に座る。トリーが居たことで先程までの緊張はすでない。

「で、結局何でトリー殿はここに居るので御座るか?」

「ああ、この女将がカーチャンと知り合いでさ。ちよつと店を開けなきゃいけない用事があるからつてな

んで、カーチャンから直々に手伝いに行けつて言われたんだよ。くつそー!! カーチャンからの頼みでなければ俺も青雷亭に行つてたのによ!!」

それはそれでヒドイ事になっていたはずだが、芸人であるからで納得する。

「しかしオマエら、ホントいいところに来てくれたぜ」

酒を注いで置きながらトリーが笑顔でいう。

「どういうことで御座る?」